

平和文化



公益財団法人 広島平和文化センター

題字 松井一實 会長

被爆74周年平和記念式典 —核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の 実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする 世界の人々と共に力を尽くすことを誓います—

被爆74年目の8月6日（火）、広島市の平和記念公園で、市主催の平和記念式典（広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）が行われ、被爆者や遺族など約5万人が参列して犠牲者の冥福と世界恒久平和を祈りました。

式典は午前8時に始まり、最初に松井一實広島市長と遺族代表2人が、この1年間に亡くなられたことが確認された5,068人の氏名が記帳された2冊の原爆死没者名簿を、原爆死没者慰霊碑の中の奉安箱ほうあんばこに奉納しました。これで名簿登録者総数は319,186人、名簿総数は117冊となりました。

続いて山田春男やまだはるお広島市議会議長の式辞、各代表による献花の後、原爆が投下された8時15分に、遺族代表の面出明子さんと、こども代表の正門和虎さんが平和の鐘をつき、参列者全員が1分間の黙祷を捧げました。

この後、松井市長が平和宣言を行いました。市長は、昨今の世界情勢により核兵器廃絶への動きも停滞するなか、今一度、人類の存続に向け、決して戦争を起ささない理想の世界を目指す必要があることを、特に、次代を担う戦争を知らない若い人に訴えたいとして、被爆者の方々の1945年8月6日の体験や訴えを紹介しました。そして、未来を担う若い人たちが、原爆や戦争を単なる過去の出来事と捉えず、また、被爆者や

平和な世界を目指す人たちの声や努力を自らのものとして、たゆむことなく前進していくことが重要だと訴えました。

また、世界中の為政者に、被爆地を訪れ、被爆者の声を聴き、平和記念資料館、追悼平和祈念館で犠牲者や遺族一人一人の人生に向き合うことや、核不拡散条約（NPT）第6条に定められている核軍縮の誠実交渉義務を果たすとともに、核兵器のない世界への一里塚となる核兵器禁止条約の発効を求める市民社会の思いに応えるよう求めました。



平和宣言を行う松井市長

さらに日本政府には、唯一の戦争被爆国として、核兵器禁止条約への署名・批准を求める被爆者の思いをしっかりと受け止め、核兵器のない世界の実現に更に一歩踏み込んでリーダーシップを発揮することや、平均年齢が82歳を超えた被爆者を始め、心身に悪影響を

目次

被爆74周年平和記念式典	①
長崎原爆犠牲者慰霊の会／全米市長会議年次総会への出席	②
ピースマッチ・ピースアクティビティの開催支援	④
中・高校生ピースクラブ「ヒロシマ青少年平和の集い」／ひろしま子ども平和の集い／ピースナイター2019	⑤
核兵器禁止条約採択2周年記念フォーラム／国際平和シンポジウム／青少年「平和と交流」支援事業	⑥
「広島・長崎講座」開設大学への支援（マレーシア科学大学）／国連軍縮フェロースの受入れ／「国際平和デー」	⑦
被爆体験記「8才の記憶『ヒロシマ』」（八幡照子）	⑧
ICMEMO広島オフサイトミーティング／	

シュモーター企画展「シュモーターハウスの原点」	⑨
資料調査研究会研究報告第15号発行／資料館本館が日本空間デザイン賞2019大賞を受賞／資料展「広島城と原爆」	⑩
こども平和キャンプ／「原爆の絵」が完成	⑪
英語で伝えようヒロシマセミナー	⑫
国内3都市で原爆展を開催／被爆体験記の執筆をお手伝いしています	⑬
被爆体験伝承者等を全国に派遣しています／令和2年追悼平和祈念館企画展「時を超えた兄弟の対話」	⑭
JICAサロン（ドミニカ共和国、スリランカ）	⑮
姉妹・友好都市の日記念イベント（ボルゴグラード）／外国人市民の生活相談コーナー	⑯



及ぼす放射線により生活面で様々な苦しみを抱える多くの人々の苦悩に寄り添い、その支援策を充実するとともに、「黒い雨降雨地域」を拡大するよう強く求めました。

平和宣言の後、こども代表の金田秋佳さんと石橋忠大君が、自分たちの大切なものがあふれている大好きな広島町の「悲惨な過去」を学び、二度と戦争をおこさない未来にするため、「互いに思いを伝え合い、相手の立場に立って考えます。意志をもって学び続けます。被爆者の思いに、私たちの思いを重ねて、平和への思いを世界につなげます。」と「平和への誓い」を読み上げました。

この後「あいさつ」の中で、安倍晋三内閣総理大臣は、近年、世界的に安全保障環境は厳しさを増し、核軍縮をめぐる各国の立場の隔たりが拡大していると指摘し、日本としては、「核兵器のない世界」の実現に向け、核兵器国と非核兵器国の双方の協力を得ながら対話を粘り強く促し、国際社会の取組を主導していくと述べました。また、NPT発効50周年という節目の年となる2020年のNPT運用検討会議において、意義ある成果を生み出すために、広島から始まった核軍縮に関する「賢人会議」の提言等を十分踏まえながら、各国に積極的に働きかけていくと述べました。このほか、被爆者の方々から伝えられた被爆体験を若い世代へと語り継いでいく取組や、広島や長崎を訪れる世界中の人々に被爆の悲惨な実相に触れていただく取組を、着実に推し進めていく考えを示しました。

また、アントニオ・グテーレス国連事務総長のメッセージを中満泉国連事務次長・軍縮担当上級代表が代読しました。事務総長は、悲しいことに、今日、国際安全保障環境が悪化し、核保有国間の緊張が高まっており、何十年にもわたり世界をより安全にしてきた軍縮や軍備管理制度を疑問視する声が聞こえ始めると述べ、私たちはいま一度、被爆者の方々や世界中に広めてきた、核兵器の使用を防ぐ唯一の確実な保証は核兵器の完全な廃絶であるという重要なメッセージを思い出さなくてはならないと訴えました。そして今日、およそ14,000発の核兵器がいまだ存在し、その多くがいつ発射されてもおかしくない警戒態勢にあるなか、この危険を低減し、最終的になくしていくため、被爆者やすべての人々とともに、全力を尽くすと述べました。

式典には36都道府県の遺族代表の他、核兵器国のアメリカ、イギリス、フランス、ロシアを含む89か国と欧州連合（EU）の大使や代表が参列しました。

式典の様子はインターネットでライブ中継されました。動画は、ひろしまムービーチャンネル (<http://www.city.hiroshima.lg.jp/movie/>) の「原爆・平和」から視聴できます。式典で読み上げられた「平和宣言」、「平和への誓い」の全文は、広島市ホームページ

(<http://www.city.hiroshima.lg.jp/>) の「原爆・平和」→「平和宣言・平和への誓い・平和に関する要請等」から閲覧できます。「平和宣言」は9言語（アラビア語、中国語、英語、フランス語、ドイツ語、ハンゲル、ポルトガル語、ロシア語、スペイン語）の外国語版も閲覧できます。

(総務課)

「長崎原爆犠牲者慰霊の会」の開催

本財団では、長崎に原爆が投下された8月9日に、広島から長崎の原爆犠牲者に哀悼の意を表し、平和への誓いを新たにすため、「長崎原爆犠牲者慰霊の会」を平成15年から毎年開催しています。

広島平和記念資料館東館地下1階会議室2での今年の慰霊の会には、被爆者や国内外からの来館者など約100人が参加しました。

まず、小泉崇本財団理事長の挨拶で開会し、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典のテレビ中継を視聴しました。原爆炸裂時刻の午前11時2分には、全員で1分間の黙とうを捧げました。

続いて、広島県原爆被害者団体協議会の箕智之理事長代行から御挨拶をいただき、最後に、長崎の被爆者である吉田勝二さんの体験を伝える紙芝居を広島市立大学国際学部の牧野衣里さんの朗読により上演しました。



長崎の被爆者（吉田勝二さん）の体験を伝える紙芝居の上演

(平和連帯推進課)

全米市長会議総会への出席等のため米国を訪問

平和首長会議の松井一實会長（広島市長）及び小溝泰義事務総長（本財団理事長）は、米国・ホノルル市で開催された第87回全米市長会議年次総会に出席し、核超大国である米国内で、平和首長会議の加盟都市の拡大及び都市・市民レベルの核兵器廃絶に向けた機運の醸成を図るための協力要請を行いました。

併せて、オバマ前大統領の母校であるプナホウ・スクールで講演を行い、被爆の実相や被爆者の切なる思いを伝え、平和への思いを共有しました。

6月28日(金)

小溝事務総長は広島市長の代理として、ホノルル市行政長官、伊藤在^{いとう}ホノルル日本国総領事、ホノルル市と姉妹都市提携を結んでいる日本国内の3都市（宇和島市、茅ヶ崎市、長岡市）の市長と共にケネディ元駐日米国大使との懇談会に出席しました。小溝事務総長はケネディ元大使に、2016年のオバマ前米国大統領の来広に御尽力いただいたことへの謝意を伝えるとともに、平和首長会議の核兵器のない世界の実現に向けた活動に対して引き続き御支援・御協力をいただきたいと依頼しました。

その後、日本国総領事館、ホノルル市、前述の3都市の代表者と共に、ホノルル姉妹都市交流サミットに出席しました。出席者は、それぞれホノルル市との姉妹都市提携の経緯を紹介し、また、市の施策に姉妹都市交流をどう位置づけ、展開しているかについて意見交換を行いました。

小溝事務総長は、ホノルルに広島出身の移民が多く定住していたことが姉妹都市提携の契機になったことなどを説明するとともに、平和首長会議が実施している事業を紹介し、取組に積極的に参加してもらうよう依頼しました。

また、ジャックリーン・カバツ本財団専門委員の呼びかけにより集まったハワイの平和活動家と意見交換会を行い、カバツ専門委員と共に平和首長会議の活動を説明しました。

6月29日(土)

平和首長会議の米国のリーダー都市であるデモイン市長が提案した、核兵器廃絶に向けた平和首長会議の取組を支持する決議文について審議する国際委員会に、小溝事務総長が出席しました。決議案について、反対意見はなく全体審議の場に提案されることに決まりました。

午前中の総会では、ケネディ元大使が講演しました。父であるケネディ元大統領が、国を動かしているのは政府だけではなく、日々市民に向き合っている市長たちの努力によるところが大きいと考えていたこと、核なき世界を希求していたことを述べられ、また、オバマ前大統領の広島でのスピーチの「和解」と「道徳心の目覚め」という言葉の重要性や広島への思いを語られました。その後、発言の機会を得た小溝事務総長は、オバマ前大統領の来広実現に向けて尽力いただいたことに対する謝意を述べ、今後の核なき世界に向けた平和首長会議の取組への協力を依頼しました。

ホノルルに遅れて到着した松井会長は、小溝事務総長と共にハワイ日本人移民慰霊碑に参拝し、広島からハワイへ移住された方々の苦労を^{しの}偲ぶとともに、第一次・第二次世界大戦の戦没者に^{もくとう}黙祷を捧げました。

6月30日(日)

松井会長と小溝事務総長は年次総会（3日目）に出席し、「アメリカの都市における100%再生可能エネルギーへの道」と題したセッションを傍聴しました。

このセッションでは、ホノルル市のコールドウェル市長がスピーチし、その冒頭で2016年のオバマ前大統領の広島訪問について触れた後に、「その広島から市長がこの場に来ている。来年広島は原爆投下から75周年を迎えるが、広島や長崎のような惨劇は絶対に二度と起こらないようにしなければならない」と述べて、松井会長を紹介されました。それを受けて松井会長がその場に起立して挨拶すると、出席者から歓迎の拍手が送られました。



全米市長会議年次総会でのスピーチ

続く昼の総会で、松井会長はスピーチする機会を得ました。全米市長会議会長であるサウスカロライナ州コロンビア市のベンジャミ

ン市長から「松井市長は平和首長会議の会長として、カウニー デモイン市長を始めとする世界の加盟都市の市長と共に核兵器のない世界の実現に向けて国際世論を拡大するため、たゆみなく活動してきた。全米市長会議も平和首長会議と長年連携関係を築いてきたが、世界情勢が混迷を極めている今ほど平和首長会議の活動が重要かつタイムリーな時はない」と紹介され、登壇しました。

松井会長は、平和首長会議の活動について説明した後、「被爆者たちは、平均年齢が82歳を超えた現在も、『こんな思いを他の誰にもさせてはならない』という信念の下、核兵器のない平和な世界が一日も早く訪れるよう訴え続けている」、「核保有国が核戦力の近代化・機能向上のために費やしている予算は、本来市民の福祉や都市の基盤づくりなどのために、より建設的に使用され得るものである。市民の安心・安全な生活を守るために日々努力されている同志の皆様には、核兵器の使用によりその努力が無に帰すことにならないよう、核兵器のない世界の実現に向けて共に歩んでいただきたいと強く願っている」と述べ、大きな拍手を受けました。

午後の「女性市長のリーダーシップ」のセッションでは、大統領選への出馬表明をしているハワイ州選出のギャバード下院議員のスピーチを傍聴しました。ギャバード議員は、先の松井市長のスピーチと同様、核兵器の開発に多額の税金が費やされていることに言及し、「それらはハワイであれば老朽化してきた

インフラ整備などに使われるべき予算である。このように国の安全保障の問題は市民の生活に直接影響するものであることを訴えるために自分は大統領選出馬を決めた」と述べられました。スピーチ後に、松井会長はギャバード議員に挨拶をし、広島訪問及び平和首長会議との今後の連携を要請しました。

その後、松井会長はハワイの新聞社からインタビューを受けました。祖母が広島の被爆者であり、広島での取材経験も有する記者からは「家族に被爆者がいることは市長としての職にどのような関係があるか」などの質問があり、会長は「母親をはじめ親戚にも被爆者がいるが、みんな家族には自分の苦しんだ経験をあまり語りたがらなかった。市長になって多くの被爆者の方々と話す中で被爆体験や気持ちを聞き、より深く母親や親戚の思いについて理解できるようになった」と語りました。また、インタビューの後半では、加盟都市であり、毎年全米市長会議において核兵器廃絶や平和首長会議への賛同決議を共同提案して下さっているオレゴン州ビーバートン市のドイル市長も同席しました。

ドイル市長は、「市長が市民と共に国を動かしていくのだ。そのため平和首長会議は核兵器のない世界に向けて世界の国々で変化を起こしていく」と力強く述べられました。

7月1日(月)



プナホウ・スクールでの講演

オバマ前大統領の母校であるプナホウ・スクールで、サマースクールに参加してアジアの歴史を学んでいる約130人の

高校生を対象に、松井会長が講演を行いました。会長は被爆の実相や被爆者の思いを伝え、「核兵器のない世界の実現への道を共に歩んでほしい」と述べました。生徒たちはメモを取りながら熱心に講演を聴いた後で、会長に対し非常に多くの質問をしました。「核兵器の廃絶は可能か」「平和首長会議の会長として活動の成果をどのようにとらえているか」「他国が原爆投下から学ぶことは何か」などの質問に対して、松井会長は、「原爆投下は人類全体にとって大変不幸な出来事だったが、再びその悲劇を繰り返さないために、意見の対立をいかに平和裏に解決できるか理性的に考え、持続可能な地球を残していくことが重要だ」と述べました。また、生徒代表に神奈川県の中学生在が折った千羽鶴を手渡し、平和への思いを伝えました。

なお、全米市長会議年次総会では、午前中に行われ

たセッションで、核兵器廃絶と平和首長会議の取組に賛同する決議文が満場一致で採択されました。これで決議文の採択は2006年から14年連続となりました。

この日の年次総会では、ミシガン州ロチェスターヒルズ市のバーネット市長が全米市長会議次期会長就任スピーチを行い、「誰でも幸せに暮らす権利を有している。我々市長はそれを実現するために努力しなければならない」と訴えました。その後、松井会長はバーネット新会長に大阪府の中学生在が折った折鶴を手渡し、加盟要請を行いました。

また、夕方からのホノルル市主催イベントでは、本年次総会まで全米市長会議会長を務め、今年の8月に平和都市宣言を行ったベンジャミン コロンビア市長や、被爆イチョウの苗木を育ててくださっているオレゴン州ヒルズボロ市のキャラウェイ市長などにも加盟要請を行い、好感触を得ました。その後、コロンビア市から加盟要請書が提出され、10月1日付で加盟となりました。

(平和首長会議・2020ビジョン推進課)

ピースマッチ・ピースアクティビティの開催支援

8月3日(土)、サッカーJ1のリーグ戦サンフレッチェ広島対北海道コンサドーレ札幌の試合が、「ピースマッ



「ヒロシマを知ろう!! 8月6日、きのこ雲の下」のポスターの展示を見る子どもたち

チ」として、平和首長会議及び本財団の後援のもと、エディオンスタジアム広島で開催されました。キャッチコピーは、「One Ball. One World. スポーツができる平和に感謝」です。約1万3千人の観客の方々に御来場いただきました。

当日は会場内外で様々なピースアクティビティの支援を行いました。

- ① 「原爆の子の像」に寄せられた折り鶴再生紙を使った折り鶴ブースの設置
- ② 試合開始前に、来場者全員による黙禱、^{もくとう}松井市長と被爆者による^{まつい}キックインセレモニー
- ③ 広島平和記念資料館平和学習講座講師の^{いまおかゆうこ}今岡祐子さんによる「平和学習講座」
- ④ 被爆の実相と現在の核兵器の状況、そして平和の大切さを、未来を担う子どもたち伝える「ヒロシマを知ろう!! 8月6日、きのこ雲の下」のポスター展示

サンフレッチェ広島、サポーター、協力団体等の皆様と連携し、多くの方にスポーツを通じ核兵器廃絶に向けた平和への思いを届けることができました。

(平和連帯推進課)

中・高校生ピースクラブ 「ヒロシマ青少年 平和の集い」の実施

本財団は平成14年度から、被爆の実相を学び、平和に対する見識を高めるとともに自ら平和の推進に取り組む人材を育成することを目的として、中・高校生ピースクラブを運営しています。



中・高校生ピースクラブによる原爆被害の概要説明

平成31年度は中学1年生から高校3年生まで37人が参加し、平和記念資料館の見学や平和記念公園内の慰霊碑等の学習、被爆体験証言者の方からお話を聞くなどして、戦争の恐ろしさや平和の大切さを学んでいます。



ディスカッションをする参加者

8月5日(月)には、被爆の実相や平和の尊さを発信するため「ヒロシマ青少年平和の集い」

を実施し、平和記念式典等に参加するため全国から派遣された14団体・131人の青少年が参加しました。

当日は、中・高校生ピースクラブ代表者4人が原爆被害の概要を説明した後、証言者の山本定男やまもとさだおさんが自身の被爆体験について講話を行いました。その後、「原爆の記憶を風化させないためには」をテーマにディスカッションをしました。

参加者からは、「日本各地から集まった同世代の子供達と平和について話す、とても有意義な時間になった」「被爆された方の話を聞き、改めて戦争をなくしたいと思いました」といった声が寄せられました。

(平和記念資料館 啓発課)

令和元年度「ひろしま 子ども平和の集い」の開催

8月6日(火)、広島市、広島市教育委員会との共催により、若い世代の平和意識の高揚と主体的な取組の促進を図る令和元年度「ひろしま子ども平和の集い」を広島国際会議場で開催しました。



発表する千葉県の市原市平和大使

最初に、広島市市民局長が挨拶を行い、広島県内外から参加した13団体の児童・生徒に、平和への熱いメッセージを広島の地から世界に向けて発信してほしいと呼び掛けました。

平和記念式典にも参列した多くの児童・生徒は、平和な世界の実現への思いをメッセージ発表や合唱、群読や作文朗読など、様々な表現方法で、熱意を持って発表しました。

最後に、発表した全ての団体に、広島市教育長がそれぞれ「アオギリ賞」、「キョウチクトウ賞」、「折り鶴賞」として、表彰状と記念の楯たてを贈呈しました。

(平和連帯推進課)

「ピースナイター2019」の開催

8月6日(火)、本財団と生協ひろしま等との共催により、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けたメッセージを広島東洋カープの試合の場を活用して発信する「ピースナイター2019」をマツダスタジアムで開催しました。12回目を迎えた今年も、昨年



緑色と赤色のピースポスターを用いて原爆ドームと同じ高さ「ピースライン25」を描く観客

「継承」をテーマに、様々なアクティビティを行いました。

- ① 松井市長や湯崎県知事等による平和を願うメッセージの放映
- ② 映画「おかあさんの被爆ピアノ」でヒロイン役を演じるAKB48の武藤十夢むとうとむさんによる始球式
- ③ 広島東洋カープの監督、選手等のユニフォームへのピースワッペンむつぎの装着
- ④ 平和首長会議のイメージカラーである緑色のピー

スポスター及び復興の象徴であるカーブをイメージした赤色のポスターを観客が使用し、原爆ドームと同じ高さの地上25メートルに描き出した「ピースライン25」による平和への願いのアピール

⑤ 小・中学生、高校生によるグラウンド内での「ピースパフォーマンス」

集まった約3万1千人の観客及び選手が一体となり、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向け平和のメッセージを発信しました。

(平和連帯推進課)

核兵器禁止条約採択2周年記念フォーラムを開催

本財団は、核兵器禁止条約採択から2周年を迎えた7月7日(日)、赤十字国際委員会(ICRC)との共催により記念フォーラム「被爆者の思いを語り継ぐ若者たち」を開催しました。松井会長は冒頭の挨拶で、会場に集まった約180人の若者等に対し、「このフォーラムを契機として、核兵器のない世界の実現に向けて自らのような行動ができるかしっかりと考えてほしい」と呼びかけました。

続いて、ICRC軍事ユニット政策顧問であるマグナス・ロボル氏が講演を行い、「核兵器禁止条約の成功のカギは、若い世代の積極的な関わりを継続させられるかどうか。声をあげて、希望と決意をもって行動する勇気を奮い起こしてほしい」と力強く述べました。パネルディスカッションでは、4人の若者が、被爆者の体験を聞いて原爆の絵を描く活動や、核兵器禁止条約の早期締結を求める署名活動など、それぞれが取り



パネルディスカッションの様子

(平和首長会議・2020ビジョン推進課)

「国際平和シンポジウム」の開催

7月27日(土)、本財団と広島市、朝日新聞社の共催により、「核兵器廃絶への道～大国の暴走を許さない～」をテーマに、国際平和シンポジウムを広島国際会議場で開催しました。

最初に、広島県尾道市出身で戦争と広島原爆を描く映画「海辺の映画館—キネマの玉手箱」を制作した大林宣彦監督と尾道市因島出身のタレント東ちづるさ

んが「平和の砦を築きましょう」と題して特別対談を行いました。大林監督は「映画で過去は変えられないが、未来は変えることができる。子どもたちに映画を



基調講演を行う大林宣彦監督とタレントの東ちづるさん

を通じて戦争の愚かさを知ってほしい」と語り、東さんは「平和を祈る、願うのではなく、自分で考え、言葉にして行動することが平和をつくる第一歩」と述べました。

基調講演では、元外務省主任分析官で作家の佐藤優氏が登壇し、一進一退を繰り返す核軍縮の歩みを振り返り、「核大国の指導者に対話を促すことが重要である」と述べました。

続くパネルディスカッションでは、佐藤氏のほか、米ハーバード大学法科大学院ボニー・ドチェルティ講師、国際協力機構(JICA) 荊尾遥技術協力専門家、大阪女学院大学大学院の黒澤満教授が、核時代のリスク、北朝鮮やインドの核などの国際情勢の行方、核兵器廃絶に向けて高まる市民社会の役割等について語り合いました。

(平和連帯推進課)

青少年「平和と交流」支援事業

核兵器廃絶と世界恒久平和の実現のための人材育成と、平和首長会議の加盟都市間のネットワーク強化を目的とする、青少年「平和と交流」支援事業を実施しました。

この事業は、国内外の平和首長会議加盟都市の青少年を対象に、被爆者の体験や平和への思いなどを伝え、若者同士の交流を深めるため、広島市等が実施する事業への参加を支援するものです。

別表のとおり、「HIROSHIMA and PEACE」、「青少年国際平和未来会議2019ヒロシマ」「ひろしま子ども平和の集い」の3事業を対象に支援を行い、各プログラムにあわせて、平和首長会議の概要説明や意見交換会等の平和首長会議独自プログラムを実施しました。

また2020年1月には「ヒロシマ平和行政実務者研修」を開催する予定です。

(平和首長会議・2020ビジョン推進課、平和連帯推進課)



参加者による意見交換(HIROSHIMA and PEACE)

(別表)

対象事業 (広島市等の所管)	広島市等が実施 する事業の概要	平和首長会議 独自プログラムを 含めた全体日程	実施場所	支援人数 (実績)	参加者の派遣元加盟自治体
HIROSHIMA and PEACE (広島市立大学国際学部)	国内外の学生等が「ヒロシマと平和」を英語で学ぶ夏期集中講座	7/30(火)～ 8/9(金) (11日間)	広島市立大学 平和記念資料館等	8人 (学生・社会人)	インパール市(インド)、クラスノダール市(ロシア)、グラノラズ市(スペイン)、サントス市(ブラジル)、テヘラン市(イラン)、マンチェスター市(英国)、京都市(京都府)、国立市(東京都)
青少年国際平和未来会議 2019 ヒロシマ (広島市教育委員会)	広島市及び姉妹・友好都市等の青少年による平和貢献をテーマにした交流活動	8/4(日)～ 8/12(月) (9日間)	広島市国際青年会館等	4人 (学生)	イーペル市(ベルギー)、グリニー市(フランス)、テヘラン市(イラン)、ハノーバー市(ドイツ)
ひろしま子ども平和の集い (・(公財)広島平和文化センター ・広島市(市民局、教育委員会))	子どもたちによる平和メッセージの発信	8/5(月)～ 8/7(水) (3日間)	国際会議場 平和記念資料館等	33人 (中・高校生、引率者)	市原市(千葉県)、日野町(滋賀県)、岡山市(岡山県)、日向市(宮崎県)、那覇市(沖縄県)

「広島・長崎講座」開設大学への支援

広島市と長崎市は、被爆の実相や被爆者のメッセージを若い世代に伝えるため、それらを学術的に整理・体系化し、学問として普遍性を持たせた「広島・長崎講座」の開設を働き掛けるとともに、その普及に取り組んでいます。

マレーシア科学大学(マレーシア)が初の平和学習

8月20日(火)、マレーシア科学大学の学生20人と教職員2人が、同講座認定後初めてとなる広島市での平和学習を行った際、本財団は、プログラムの実施を



ピースボランティアによる平和記念公園の案内

支援しました。一行は、平和記念公園や平和記念資料館の見学、小倉桂子さんによる被爆体験講話の聴講、被爆体験記朗読会の聴講などを通して、被爆の実相について学びました。

(平和首長会議・2020 ビジョン推進課)

国連軍縮フェローズの受入れ

国連が主催する軍縮専門家育成のための「国連軍縮フェロシップ・プログラム」に参加する研修生(フェローズ)を、10月2日(水)から3日間、広島に受け入れました。

このプログラムは、国連が昭和54年(1979年)から実施している研修事業で、広島では昭和58年(1983年)から毎年受け入れを続け、これまでに受け入れた

「国際平和デー」記念行事の開催

国連は、毎年9月21日を「国際平和デー」と定め、世界の停戦と非暴力の日として、この日一日、敵対行為をやめるよう呼び掛けています。

本財団では、この趣旨に賛同し、記念行事を開催しています。市民を含む約80人の参加の下、原爆死没者慰霊碑に献花を行うとともに、参加者を代表して広島県生活協同組合連合会の福島守事務局長が平和の鐘を打ち鳴らす中、参加者全員で一分間の黙とうを捧げ、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を祈念しました。また、「2020年までの核兵器廃絶を！」という平和首長会議の横断幕を慰霊碑前に掲げ、核兵器の廃絶を訴えました。

ホームページやフェイスブックを通じた100日前メッセージの発出やメールマガジンによる呼び掛けにより国内外の平和首長会議加盟都市においても、様々な記念行事が開催されました。

(平和連帯推進課)

フェローズは900人を超えました。

今回は、25か国・地域の若手外交官等27人が参加しました。

一行は10月2日(水)の広島到着後、平和記念資料館を見学し、原爆死没者慰霊碑への献花を行いました。歓迎レセプションでは、被爆体験証言者など地元参加者と交流を深めました。翌3日(木)は、原爆死没者追悼平和祈念館、原爆ドーム等を見学しました。また、広島市民から被爆の実相を伝える書籍やCD、地元の高校生から銅板で折られた折り鶴の寄贈を受けました。更に、被爆体験証言を聴講した後、放射線影響研究所を訪れてウーリック副理事長兼業務執行理事から放射線が人体に与える影響について講義を受け、

施設を見学しました。

最終日の4日(金)には、小泉本財団理事長から平和首長会議の核兵器廃絶に向けた取組などについて説明を受けました。



原爆ドームを見学するフェローズ一行

一行からは、大変感銘を受けた広島訪問であったとの感想が寄せられており、平和記念資料館の見学や被爆体験証言の聴講などを通して被爆の実相について理解を深め、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現という被爆地の思いを共有することができた3日間でした。

(平和首長会議・2020 ビジョン推進課)

被爆体験記



8才の記憶 「ヒロシマ」

本財団被爆体験証言者
八幡 照子

太平洋戦争末期

私は8才のとき被爆しました。

その前年、広島市己斐国民学校に入学。校門を入ると桜が満開で、花びらがひらひらと舞って校庭を薄桃色に染めていきました。ラジオをつけると、「大本営発表！ 敵航空母艦撃沈セリ。我が方ニ大ナル損害ナシ」と勇ましい声が響きます。しかし次第に戦局は厳しくなり、朝礼の後、上級生が「命一つとかけがえに百人千人斬ってやる」と歌いながら行進していました。日本は絶対勝つと信じ、本土決戦の決意をしていたのです。

8月6日 きのご雲の下で

あの日、空は晴れて爽やかな朝でした。爆心地から2.5km離れた己斐本町の自宅には、父方の曾祖母、祖母、両親、姉、私、弟二人の8人がいました。朝食後、私は隣に行くため裏庭に下りた時です。突然、窓がピカーッと青白く光りました。とっさに私は地面に伏せようとして、意識を失いました。

「みんなここに集まりなさい！」母の叫び声に気がつくのと、辺りは見えないほどの土煙。家の中はひっくり返り、廊下のガラスが倒れたふすまに、びっしり矢のように刺さっています。私は裏庭から玄関まで、5、

6m吹き飛ばされていました。「みんなで死のう！ みんな一緒よ」母は悲壮な声で大きな掛布団を家族の上に広げました。第2、第3の大型爆弾がきたら、もう助からないと思ったのです。布団を被り肩を寄せ合った、あの時の家族のぬくもり、子ども心に感じた家族の絆を今も忘れません。

外は、家々がすべて半壊で異様な静けさでした。避難した山裾に大粒の雨が降ってきて、私達はずぶ濡れになりました。これが「黒い雨」だとは知る由もありません。己斐の河原に引き返す途中、市中から逃げてくる人達の姿に足がすくみました。髪の毛は逆立ち、全身大やけど。土埃で汚れ、めくれた腕の皮膚が、への字に曲げた手の指先にボロ布のように垂れ下がっています。ただれた体を引きずって何十人、何百人の人が押し寄せてきて、幽霊の行列のようでした。市街地は一晩中燃え続けていました。

8月9日 火葬場と化した校庭

幸い家族は、怪我はしましたが何とか無事でした。私は額の傷の治療のため、父と学校の救護所に行きました。校門を入ると、悲鳴とも呻き声ともつかないざわめきが聞こえて驚きました。

教室にも廊下にも大やけどを負った人達がぎっしり横たわっています。顔は火膨れでみんな目が開いていません。亡くなった人達は担架で運動場に運ばれ、幾筋も掘られた穴に放り込まれるようにして荼毘に付されています。真夏の熱気で、燃え盛る火に陽炎が燃え、黙々と作業する人の姿が揺れていました。吹き上がる煙の異臭が学校中に漂っていました。

そんな中、校門の近くで机の上にハガキ大の白い紙袋が並べられていました。「お菓子配っとる！」お腹がペコペコだった私は飛んでいってみました。そして、がっかりしました。袋の中身は骨だったのです。捜しにきた肉親が、せめてもの供養にと持ち帰ったと言われます。ここで荼毘に付された約二千人と記録されている遺体の中には、建物疎開作業中に犠牲になった中学生、女学生の一、二年生が多かったと聞きます。どんなに苦しかったことか。どんなに生きたかったことか。一瞬のうちにすべてを失いました。



市民が描いた原爆の絵「国民学校校庭で火葬する消防団、自警団の人々」

作者 津沢与吉

かけがえのない命

2013年、私はピースボートの「ヒバクシャ地球一周

証言の航海」に参加しました。私達はこの広い地球に生まれ合わせ、国や言葉は異なっても同じ時代を生きています。百年というライフステージに陽は昇り、陽は沈み、寄せては返す波のようにかけがえのない日常があります。あなたの愛する人は誰ですか。あなたの守りたいものは何ですか。今、一発の核兵器が使われたとしたら、人類は滅亡します。被爆の実相を伝え、世界に警鐘を鳴らし続けることが、今を生きる私に出来ることです。

プロフィール

〔やはた てるこ〕

2013年、外務省より非核特使として委嘱。ピースボート「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」に参加。2019年より(公財)広島平和文化センター被爆体験証言者として活動開始。

世界の平和博物館関係者が集まるICMEMO広島オフサイトミーティングを開催しました

令和元年9月5日(木)、^{アイコム} ICOM (国際博物館会議) の国際委員会の一つである ^{アイシーメモ} ICMEMO (公共に対する犯罪犠牲者追悼のための記念博物館国際委員会) の広島オフサイトミーティングが平和記念資料館メモリアルホールで開催されました。これは9月1日から7日まで日本で初めて開催された ICOM 京都大会の日程中に ICMEMO が京都を離れ広島で講演会を行ったもので、一般入場者を含めて229人が参加しました。



クリフォード・チャニン氏による基調講演

^{まついかずみ} 松井一實広島市長、スアイ・アクソイ ICOM 会長の挨拶の後、3人の講師による講演が行われました。(使用言語:英語(同時通訳あり))

主催: ICOM、ICMEMO 共催: 広島市、公益財団法人広島平和文化センター)

○基調講演

クリフォード・チャニン 9・11 記念館副館長
「社会の記憶と個人の悼み—利害の狭間にあるメモリアルミュージアム」

○講演

イラッチェ・モモイティオ ゲルニカ平和資料館館長
「ゲルニカ(スペイン内戦)で変わった戦争の手段」

○講演

ジェーン・クリンガー 米国ホロコースト記念館保

存チーフ

「写真の言語とその隠された意味」

【お問い合わせ】

平和記念資料館 学芸課

☎ (082) 241-4004

シュモーハウス企画展

「シュモーハウスの原点 —皆実平和住宅建設70年—」 を開催しています

場 所 平和記念資料館附属展示施設
シュモーハウス

(中区江波二本松1丁目2-43)

期 間 令和元年8月2日(金)～12月8日(日)

展示資料 1949年8月から10月にかけて行われた皆実町での建設の様子を写した写真、資料など パネル10枚(写真23枚、図面2枚、文書資料1枚)

入場無料

1949年(昭和24年)から1953年(昭和28年)の間、米国シアトルに住むフロイド・シュモー氏は、原爆投下により家を失った広島・長崎の人々のために家を建てる活動を行いました。

「広島の家」と名付けられたこの活動では、最初の建設が1949年8月から10月にかけて広島の皆実町で行われ、2棟の二軒長屋が完成し広島市に寄贈されました。

この展示では最初の建設から70年となるこの機会に、その後のシュモー氏の日本はもとより朝鮮半島や中東での活動の原点ともなった、この建設を写真や資料とともに振り返ります。

未来を担う若い世代をはじめ多くの方にご来場いただき、シュモー氏が家を建てる活動に込めた想いを受け止め、平和な世界をつくるためには私たち一人一人がお互いを理解し、思いやり、友情を育むことが大切なのだと感じていただければと思います。



皆実町での住宅建設
1949年(昭和24年)8～9月

寄贈/ ^{きたざわみこ} 北澤純子氏、
寄託/シュモーに学ぶ会

【お問い合わせ】

平和記念資料館 学芸課

☎ (082) 241-4004

平和記念資料館資料調査研究会 研究報告第15号を発行しました

平和記念資料館資料調査研究会の調査研究の成果をとりまとめた『広島平和記念資料館資料調査研究会研究報告』第15号を発行しました。

【執筆者と論文のテーマ】

◆石丸 紀興

特別法「旧軍港市転換法」適用都市における都市政策の展開と課題

◆北川 建次

こどもの目から見た昭和10～20年代の広島

◆高妻 洋成

広島平和記念資料館の展示環境

◆静間 清

広島原爆線量評価に果たした被爆建造物および被爆資料の役割（その2）—爆心からの距離と残留放射能¹⁵²Euの強度分布

◆竹崎 嘉彦

広島原爆における被害状況を視覚化した事例としての写真地図の調製

希望者には、先着順に100部を無償配布します。

また、論文は当館ホームページ（<http://hpmmuseum.jp/>）にも掲載しています。

「平和記念資料館本館」が日本空間デザイン賞2019大賞を受賞

本年4月25日にリニューアルオープンした「平和記念資料館本館」が、日本空間デザイン賞2019大賞を受賞しました。応募総数約1,100件の最高賞にあたります（主催：一般社団法人日本空間デザイン協会・一般社団法人日本商環境デザイン協会）。2017年4月に先行してリニューアルオープンした「平和記念資料館東館」の「DSA 日本空間デザイン賞 2017大賞」に続いての大変栄誉な受賞となりました。

この贈賞式は2019年10月4日に元赤坂の明治記念館で行われ、滝川卓男平和記念資料館長が、業務を受注した株式会社丹青社とともに本式典に出席しました。

【お問い合わせ】

平和記念資料館 学芸課

☎（082）241-4004

【お問い合わせ】

平和記念資料館 学芸課

☎（082）241-4004

資料展「広島城と原爆」を開催

浅野氏入城400年を迎え注目が集まる広島城の原爆被害を改めて振り返る資料展を、令和元年10月1日から令和2年2月末（予定）まで平和記念資料館東館地下1階で開催しています。

戦前、広島城の城郭一帯には陸軍の施設が集まっていました。国宝の天守閣をはじめ、一帯の施設は原爆で壊滅。本丸下段にあった中国軍管区司令部で、司令部の職員700余人と比治山高等女学校の生徒・教員64人、拘留所の米軍捕虜2人が死亡しました。堀の近くの中国軍管区司令部防空作戦室は女生徒が被爆の第一報を送信した場所で、今もその一部が残り、平和学習の場になっています。

今回の資料展では、昭和10年頃の花見客で賑わう広島城の写真と、同じアングルで撮影された被爆直後の写真を並置して、壊滅の状況を説明するなど、近年確認された貴重な写真を含む画像30点を展示し、広島城の原爆被害の状況を分かりやすく説明しています。また、天守閣の崩落の状況を描いた「市民が描いた原爆の絵」は、当館が協力してNHKが8Kスーパーハイビジョンの超高精細カメラで撮影したりアルな複製画像を使用しています。このほか、昭和10年10月撮影の広島城一帯の航空写真（毎日新聞社提供）も展示しています。

来場者からは、「被爆前の広島城が国宝だったと初めて知りました」「広島城から、女学生が原爆被害の第一声を報じていたとは、知りませんでした」「広島城一帯の航空写真は見ごたえがあった」等の感想が寄せられています。



広島城でのお花見（天守閣 南東から）（昭和10年頃、豊田正一さん撮影 豊田健二さん寄贈）



天守閣跡 南東から（昭和20年10月、林重男さん撮影）

（平和記念資料館 学芸課）

こども平和キャンプ ～楽しみながら平和を考える～

本財団では、6月1日（土）から一泊二日の日程で、小・中学生向けの平和キャンプを、広島市似島臨海少年自然の家と共催で実施しました。

通算26回目となる今年のキャンプには、4年生以上の小学生26人、中学生3人、18歳以上のボランティア5人の計34人が参加しました。



被爆電車での平和学習の様子

一日目は、平和学習講座で原爆被害の概要や被爆者の思いなどについて学んだ後、リニューアルオープンした平和記念資料館をヒロシマピース ボラン

ティアの解説を受けながら見学しました。その後、平和記念公園内の碑を巡って原爆ドーム前まで移動し、被爆電車に乗車して平和学習をした後、似島へ向かいました。似島では第一次世界大戦時の俘虜によって伝えられたバウムクーヘン作りを体験して一日の活動を終わりました。

二日目は、原爆と似島の関係などについて学んだ後、実際に島内の遺構を巡りました。最後に慰霊碑を参拝した後、自然の家で二日間の活動を振り返りました。

キャンプの間、子どもたちは集中して学習に取り組んだり、バウムクーヘン作りを楽しんだり、充実した時間を過ごしました。

アンケートでは、「戦争は本当にこわいと思ったので、自分で小さなことからでもやっつけていこうと思った。」「また今度、夏休みに平和記念資料館に行こうと思った。」「ケンカをしていたら、止めてあげようと思った。」「また争いをしたら、せっかくの夢がもう叶わなかもしれないから、平和ということを忘れないようにしようと思った。」など、自分なりの視点で平和について考えようとする姿勢が見られ、有意義な機会となりました。

（平和記念資料館 啓発課）

「原爆の絵」が完成 —高校生たちが被爆体験を絵に描く—

本財団は、広島市立基町高等学校普通科創造表現コースの協力を得て、平成19年度から、本財団被爆体験証言者と同校生徒が共同し、証言者の記憶に残る被爆時の光景を描き、当時の状況を伝える「原爆の絵」

の制作に取り組んでいます。

5人の証言者と11人の生徒が平成30年度から制作を進め、このたび11点の絵画が完成しました。

7月1日（月）に基町高等学校展示ギャラリーで行われた完成披露会には、5人の証言者と、絵を制作した生徒を始めとする創造表現コースの生徒のほか、本財団及び基町高等学校関係者が出席しました。

原爆が投下された後、郊外へ避難する人々とその傍らで力尽きた人々のいる光景を描いた生徒は、「一人ひとりのストーリーを考えるのがすごく苦しかった。原爆に遭った人の深い悲しみというものが襲ってくるような感じで、胸が押しつぶされるような気分だった。」と、制作過程で感じた気持ちを話してくれました。

市内中心部の焼け跡で絶望し自ら望んで死を待つ人を描いた別の生徒は、戦争を知らない世代である自分にとって、死にゆく、自分が死ぬのを待つ、ということが想像できず、教員に何度も絵を見せたり、当時の資料を調べたりしたそうです。そして、様々な試行錯誤の中で、被爆体験証言者の話を何度も聞くうちに、「このような悲惨な光景を見た被爆者の気持ちを大切にしたいのではないかと思います。それこそが追体験をすることだと感じた。」と、心境の変化があったことを話してくれました。

完成した「原爆の絵」は、被爆体験をより深く理解してもらうため、証言者による被爆体験講話で活用するほか、絵の貸出や画像データの提供なども行い、原爆被害の実相を後世に継承するために役立てています。



「目もくらむ光」

制作：原田真日瑠（基町高等学校普通科創造表現コース）、小倉桂子（被爆体験証言者）



「暗闇の中で燃える小屋」

制作：桂木晋作（基町高等学校普通科創造表現コース）、小倉桂子



「放置されたままの黒い死体」

制作：河元愛香かわもとまなか（基町高等学校普通科創造表現コース）、笠岡貞江かさおかさだえ（被爆体験証言者）



「忘れられた女学生の遺体」

制作：下西由心名しもにしゆみな（基町高等学校普通科創造表現コース）、末岡昇



「お母さんは何処？」

制作：岸まりもきし（基町高等学校普通科創造表現コース）、笠岡貞江



「家族の火葬」

制作：河本羽菜日かわもとほなび（基町高等学校普通科創造表現コース）、末岡昇



「避難する人と力尽きた人」

制作：小野美晴おの みほる（基町高等学校普通科創造表現コース）、川崎宏明かわさきひろあき（被爆体験証言者）



「家族の遺体を掘り出す」

制作：祢宜泳子ねぎようこ（基町高等学校普通科創造表現コース）、末岡昇



「絶望・死にゆく人」

制作：是永千穂これながちほ（基町高等学校普通科創造表現コース）、末岡昇すえおかのぼる（被爆体験証言者）



「最も大切なものを」

制作：富士原芽依ふじわらめい（基町高等学校普通科創造表現コース）、原田浩はらたひろし（被爆体験証言者）

（平和記念資料館 啓発課）



「流れ着いた棺代わりの木箱」

制作：猿田起之さるた けい（基町高等学校普通科創造表現コース）、末岡昇

英語で伝えよう ヒロシマセミナーの実施

平和記念資料館では、原爆被害の実相を正しく英語で伝えるための知識と表現を学ぶ「英語で伝えようヒロシマセミナー」を平成18年度から実施しています。今年度は、7月14日（日）にベーシック編、21日（日）

にアドバンス編をそれぞれ実施し、10代から70代まで合計351人が参加しました。

ベーシック編では、翻訳・通訳家のポーリーン・ポールドウィン氏が、原爆被害の概要について日本語を交えながら英語で説明しました。

アドバンス編では、広島女学院中学高等学校教諭のジェラルド・オサラバン氏が講師を務め、原爆被害の概要を英語で説明しました。その後、一般社団法人ひろしま通訳・ガイド協会理事の畝崎雅子氏が、日本語と英語で平和記念公園内の慰霊碑の解説を行いました。



アドバンス編の様子

参加者からは、「資料がわかりやすく、説明も良かった」「海外の人からの視点がわかった」「ガイドの参考になった」といった声が寄せ

られました。

資料館では、来年2月にも同セミナーを開催する予定です。

(平和記念資料館 啓発課)

国内3都市で原爆展を開催しました

平和記念資料館では、原爆被害の実相を伝え、核兵器廃絶に向けた国内世論を醸成するため、平成8年度から国内各地の都市で原爆展を開催しています。

本年度は、徳島県徳島市（メイン・サテライトの2会場で開催）、鳥取県鳥取市、千葉県市川市で開催し、3都市合わせて、およそ1万人の来場者がありました。

鳥取県内で原爆展を開催したのは、今回が初めてです。これをもって、被爆地である広島県と長崎県を除く全ての都道府県での開催を達成し、節目の回となりました。

各展示会場では、被爆資料のほか、被爆の実相や核兵器の現状を伝える写真パネル、高校生と被爆体験証言者が共同で描いた



展示解説を受ける来場者(徳島市)



被爆体験講話の様子(鳥取市)

原爆の絵などを展示しました。展示に加え、徳島市では笠岡貞江さんが、鳥取市では梶本淑子さんが、市川市では市川被爆者の会が、それぞれ被爆体験講話を行いました。



被爆体験記朗読会の様子(市川市)

聴講された方は、被爆体験証言者の一言一言に耳を傾けていました。

来場者からは、「祖父から戦争体験を聞いたことはあるが、幼かった私にはあまり悲惨な話はしなかったようだ。もっと知りたいと興味はあったが、なかなか広島まで足を運べないので地元で展示を見られてありがたい。」「被爆体験を風化させてはいけなく、後世に語り継いで戦争の凄惨さを子どもたちにも知ってもらう努力をしなければいけないと思った。」などの感想が寄せられました。

実施の概要

【徳島県徳島市】

(メイン会場)

期間：7月10日（水）～7月30日（火）（休館日を除く・18日間）

場所：徳島県立21世紀館

(サテライト会場)

期間：7月10日（水）～8月7日（水）（29日間）

場所：徳島県戦没者記念館

来場者数（2会場計）：8,113人

【鳥取県鳥取市】

期間：8月4日（日）～8月18日（日）（休館日を除く・14日間）

場所：鳥取市歴史博物館

来場者数：1,114人

【千葉県市川市】

期間：8月14日（水）～8月22日（木）（休館日を除く・8日間）

場所：生涯学習センター

来場者数：663人

(平和記念資料館 啓発課)

被爆体験記の執筆をお手伝いしています

被爆者の高齢化が進み、その体験を記録して原爆の悲惨さ、非人道性を人類の教訓として後世に伝えることが急務となっています。国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、被爆の記憶を体験記として残したいけれども執筆することが困難な方から、聞き取りを行って体験記としてまとめる被爆体験記執筆補助事業を

行っています。

今年度は11人から聞き取りを行います。当館では執筆補助を希望された方の被爆に関する証言映像などの資料を確認し、被爆当時の住所、所属していた学校や職場などの情報を整理して、ご本人からお話を伺います。

今年度の最高齢の方は98歳です。体の不調を抱えながらも、同じく被爆者の妹さんと一緒に語っていただきました。「建物内で大きな衝撃を受け、直後に外を見ると、全身の皮膚が焼けただけ、見るも無残な姿の人が行列していた」など、74年以上たった今もなお、思い出すことさえ辛い悲惨な情景を詳しく話されます。あの日のことを残したい、伝えたいという強い思いを感じました。



職員がご自宅に伺い、当時の地図を一緒に見ながら被爆体験を聞き取ります。

被爆後の暮らしや人生についてもお話を聞きます。戦後就いた仕事を振り返って、「不測の事態やもめ事が起こっても、必ず一度立ち止まり、冷静に考えて対処してきた。そのような冷静さは、国境を超えて人と人、国と国が向き合うときに、争いを起こさないために必要だ」と語られた方もいます。戦争体験と戦後の苦勞に裏打ちされた重みのある言葉一つ一つに聞き入りました。

祈念館では被爆体験記を約14万編収蔵しており、執筆補助事業により編さんしたものが140編あります。これらは祈念館やインターネット（平和情報ネットワーク：<https://www.global-peace.go.jp/>）でも読むことができます。ぜひ被爆体験記に触れてください。

（原爆死没者追悼平和祈念館）

被爆体験を語り継ぐため、被爆体験伝承者・被爆体験記朗読ボランティアを全国に派遣しています

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、平成30年度から、被爆者の体験や平和への思いを次世代に語り継ぐため、全国の小中学校、高等学校、自治体、その他の団体が行う平和学習の場に、被爆体験伝承者と被爆体験記朗読ボランティアを無料で派遣する「被爆体験伝承者等派遣事業」を実施しています。

平成30年度の派遣件数は306件（被爆体験伝承講話270件、被爆体験記朗読会36件）でした。2年目となる今年度は、450件を超える派遣を実施する予定です。

5月には、ロシア・ボルゴグラード市でも英語による被爆体験伝承講話と被爆体験記朗読会を開催しまし

た。

派遣先の学校等からは多数の感想が寄せられています。被爆体験伝承講話を聴いて、「原爆が落とされた当日の様子を体験しているかのように緊張感をもって聞



被爆体験伝承者の話に耳を傾ける子どもたち（令和元年10月24日／福島県いわき市立入遠野小学校）

くことができ、当時の写真や時代背景等の説明もあり、社会科の学習にもつなげることができました。広島で生まれ育った方の話を直接聞くことができたことは、児童にとっても教員にとっても、とても有意義な時間となりました。また、被爆体験記朗読会では、「生徒は真剣に耳を傾けていました。一人ひとりの命の尊さや、一瞬で当たり前の日常を奪い去った原爆、また、戦争について、この朗読会を通じ生徒は多くのことを感じ取ったようでした。」などの感想が寄せられています。

実施内容についての詳細は、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館ホームページ（<https://www.hirotsuitokinenkan.go.jp/>）に掲載しています。

【お問い合わせ】

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館

☎（082）207-1202

追悼平和祈念館 令和2年企画展

時を超えた兄弟の対話

—ヒロシマを描き続けた四國五郎と死の床でつづった直登の日記—

場所 追悼平和祈念館 地下1階
情報展示コーナー
期間 令和2年（2020年）
1月1日（水）～12月29日（火）

画家としての才能を、反戦・核廃絶を訴えることに全て捧げた四國五郎（1924-2014）。そのきっかけは、最愛の弟・直登（1927-1945）が原爆により18歳で短い生涯を閉じたことでした。

「死んだ人々に代わって絵を描こう。戦争反対・核兵器廃絶を。芸術になるまいが…」弟の死が兄にこう決意させたのです。

終戦間近、兄・五郎は満州へ渡り関東軍に入隊、弟・直登は広島で招集さ



企画展チラシ

れ、市内で警備の任務に就いていました。約千キロ離れた場所で、5人兄弟で最も仲の良かった2人は、お互いの無事を思い続けたのです。

企画展では、被爆当日から亡くなるまで、病床でつづられた弟・直登の日記を中心に、兄・五郎の追悼文や作品を紹介しながら、時を超えた2人の対話を再現します。

【展示内容】

(1) 映像展示 (大型3面映像、約30分)

1945年8月6日、四國直登は爆心地から約1キロの^{のぼり}戦町の臨時兵舎で被爆。左脚に重傷を負い2日後に帰宅しますが、母や弟の懸命な看病もむなしく8月28日に亡くなりました。直登はその過程を毎日欠かさず日記につづっていました。3年間のシベリア抑留から帰国し、弟の被爆死を知った五郎が、この日記を読んで直登と対話するように思いを語ります。

女優の^{きょうち}木内みどりさんが五郎と直登の二役を演じ、映画監督で俳優の^{つかもとしんや}塚本晋也さんがナレーションを務めます。

(2) 情報端末での展示 (日本語、英語、韓国・朝鮮語、中国語の4言語で閲覧ができます)

- ・四國五郎は、亡き弟をしのんで多くの著作を残しています。直登に捧げた詩「弟への鎮魂歌」を含む全6編を紹介します
- ・四國五郎は、人間の最も根源的なものである母と子のつながりが平和を下支えすると確信し、母子像を描き続けました。広島^の橋などの作品と共に「四國五郎作品ギャラリー」でご覧いただけます。

(3) 四國五郎の実際の作品を10数点展示します。

(4) 講演会や屋外イベントの開催も企画しています。

2020年のお正月からの開催です。みなさまぜひご来館ください。

(原爆死没者追悼平和祈念館)

**JICAサロン
ドミニカ共和国ってどんな国？
スリランカってどんな国？
～青年海外協力隊が語る派遣国の魅力～**

7月21日(日)、広島国際会議場国際交流ラウンジを会場に、(独)国際協力機構中国センター(JICA中国)との共催で、平成31年度第1回JICAサロン「ドミニカ共和国ってどんな国? ～青年海外協力隊が語る派遣国の魅力～」を開催しました。また、10月27日(日)には、第2回JICAサロン「スリランカってどんな国? ～青年海外協力隊が語る派遣国の魅力～」を開催しました。

7月開催の「ドミニカ共和国ってどんな国?」では、2016年から2年間、ドミニカ共和国にて、「小学校教育」という職種で、教師を目指す学生に算数を教える

などの教員養成を行った瀬下^{せしもがく}岳さんにお話を伺いました。また、同じくドミニカ共和国にて、2015年から1年間、JICA短期ボランティアの日本語教師として活動された大方^{おおかたよしえ}芳恵さんも講師として参加してくださいました。



講師の瀬下さんと大方さん。カーブのユニフォームを着て、会を盛り上げてくださいました。

ドミニカ共和国はカリブ海に浮かぶ島です。人々は陽気でやさしく、日々の暮らしを楽しみ、毎日の幸せに感謝をする人が多いそうです。

第二次世界大戦後、日本政府により海外移住振興策が打ち出され、1956年から59年にかけて249家庭がドミニカ共和国へ農業移住しました。移住の歴史としては比較的新しいのですが、ドミニカ共和国に野菜栽培や生野菜を食べる習慣が普及し、野菜の消費が拡大したのは、日系移住者の功績^{ゆかり}によるところが大きいとのこと。また、広島との所縁も深く、瀬下さんの派遣先の町サンペドロ・デ・マコリスにはカーブアカデミーがあり、広島出身者も在住していらっしゃいます。山間の町ハラバコアでは、広島市から寄贈されたごみ収集車が走っているそうです。広島との意外な繋がりを知り、ドミニカ共和国をととても身近に感じることができました。

10月開催の「スリランカってどんな国?」では、瀬下さんと同じ職種「小学校教育」で、2017年から2年間スリランカにて活動された吉村^{よしむらほのか}歩野花さんにお話を伺いました。

吉村さんはスリランカ北部州に位置するキリノッチ県に滞在し、現地の小学校で児童への指導や教師への助言などの活動を行いました。日本の小学校で行われている朝の読書時間の導入や、算数



民族衣装のサリーを着てお話しされた講師の吉村さん。タミル語の文字を紹介してくださいました。

のワークブックの作成など幅広く活動されました。また、他の協力隊と共に原爆展を開催し、原爆の恐ろしさを子どもたちに伝えるために人形劇を催したり、平和について考えるグループワークを行ったりしました。

今回、スリランカでの生活の様子を写真や動画を交えながら紹介してくださいました。スリランカは紅茶の産地として有名ですが、スリランカの人々はとても甘い紅茶を好んで飲むそうです。反対に、主食となる

カレーはとても辛いものが多く、そのギャップに戸惑ったエピソードなど、楽しいお話を聞かせてくださいました。

一方、スリランカでは2009年まで26年もの間内戦が続き、内戦が終結した現在でもその爪痕が残っているそうです。特に吉村さんが滞在したキリノッチ県は内戦の激戦地であったため、他の地域よりも復興が遅れているとのことでした。

別々の国で同じ職種で活動された瀬下さんと吉村さんのお話を伺い、国や文化は異なっても、教育の大切さは普遍であると改めて知ることができました。また、お二人とも海外での貴重な経験を通して、日本の良さを再認識したと話されていたことが印象的でした。

(国際交流・協力課)

姉妹・友好都市の日記念イベント ボルゴグラードの日

9月8日(日)、記念イベントを開催しました。(主催—平成31年度ボルゴグラードの日実行委員会)

来場者には、ロシア・ボルゴグラード市の紹介展示コーナーで、ロシアの民芸品やボルゴグラード市の風景写真、広島市とボルゴグラード市の青少年交流の紹介展示を見ていただきました。

また、食文化体験コーナーでは、ロシア風のギョウザ“ペリメニ”と黒パンを提供し、来場者の皆さんは、

試食しながら、^{たなかかづき}田中香月さんのピアノ演奏を楽しみました。

ホールでの記念セレモニーでは、^{くろかわとみあき}黒川富秋実行委員長、^{こいけのぶゆき}小池信之広島市副市長の挨拶に続いて、ボルゴグラード市長のメッセージを、司会進行を務めたヒロシマ・メッセンジャーのクロット・アンドレイさんがロシア語で代読しました。また、来賓として出席された在大阪ロシア連邦総領事館領事のシュベツォワ・エレナさんから、あいさつをいただきました。

その後、ヒロシマ・メッセンジャーのお二人が画像と映像を使いながら、ボルゴグラード市の紹介と、「他民族国家」をテーマにロシアの紹介を行いました。

ロシア音楽コンサートでは、昨年に引き続きエリザベト音楽大学の学生2人が、フルートとピアノでロシア音楽を演奏し、続けて広島合唱団の皆さんが、さまざまなロシアの楽曲を披露しました。また、ロシアグッズの当たるお楽しみ抽選会を行い、会場は大いに盛り上がりました。



エリザベト音楽大学生お二人の演奏

当日は天候にも恵まれ、約160人の参加者があり、ボルゴグラード市との姉妹都市交流を深めました。

(国際交流・協力課)

広島市外国人市民の生活相談コーナー —9月から、相談コーナーを拡充しました—

「外国人市民の生活相談コーナー」では、今年9月から、毎週火曜日と金曜日、ベトナム語相談員による相談業務を行っています。

また、これまでのポルトガル語とスペイン語相談員による安芸区役所出張相談に加え、基町管理事務所において中国語相談員による出張相談も行っています。

10月からは、毎月第2金曜日に、広島出入国在留管理局の職員による出張相談にて、在留資格に関する相談に応じています(予約要)。ぜひご利用ください。

【開設日時・場所等】(太枠部分：拡充部分)

場 所	対応言語	開設日	時 間
国際会議場 (国際交流ラウンジ内)	中国語 ポルトガル語 スペイン語	月～金曜日	午前9時～午後4時
	ベトナム語	火、金曜日	
基町管理事務所 (基町団地内)	中国語	毎月第2火曜日	午前10時15分～午後12時30分 午後1時30分～午後4時
安芸区役所 (区政調整課内)	ポルトガル語	毎月第2水曜日	
	スペイン語	毎月第3木曜日	

【連絡先】 TEL：(082) 241-5010 E-mail：soudan@pcf.city.hiroshima.jp

【休室日】 祝日、8月6日、12月29日～1月3日